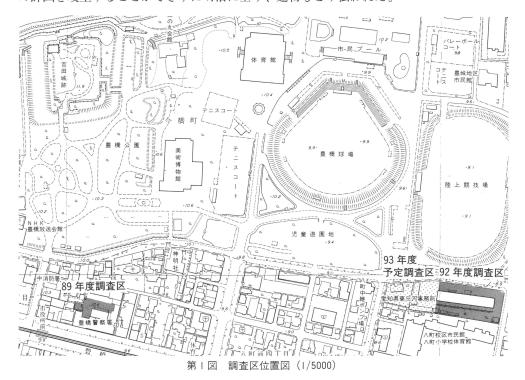
## 古田城遺跡

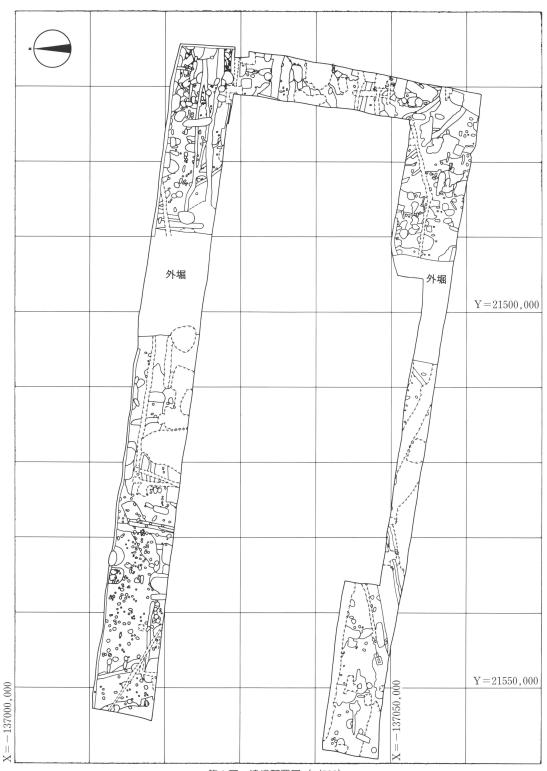
## 調査の経緯

吉田城遺跡は、豊橋市八町通に所在し、豊川の左岸、朝倉川と合流する豊橋段丘上に位置する。当センターでは、89年度に実施した豊橋警察署600㎡(報告書刊行済み)につづいて、愛知県東三河事務所の建て替えに伴う跡地を今年度(1月~3月・2600㎡)と来年度(4月~7月・2700㎡)の予定で現在発掘調査を実施している。

豊橋市は、昔は吉田、それ以前は今橋と呼ばれ、永正 2 (1505) 年にこの地にはじめて城を築いたのは、牧野古白であった。天文15 (1546) 年、今川義元が攻略して城代を置いたが、桶狭間の合戦後の永禄 7 (1564) 年、徳川家康の手に帰し、酒井忠次が城主となった。忠次は城地を三の丸まで拡大したが、天正18 (1590) 年、徳川家康の関東移封とともに池田輝政が15万7000石をもって入封した。

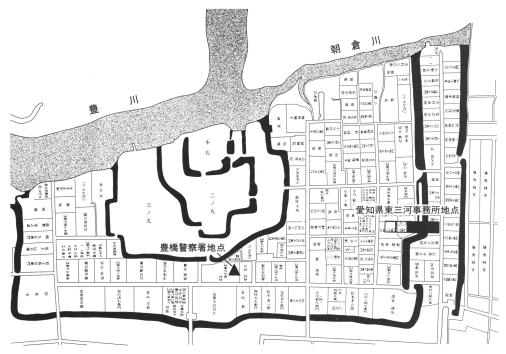
輝政も城郭を拡大し、本丸・二の丸・三の丸と外堀を梯形状に組み合わせた様式の城郭を計画した。しかし輝政は、関ヶ原の戦いの功績にて姫路に移封となり、その後入城した 9 家22代の譜代大名たちがいずれも 3 万石~ 7 万石の小大名であったため、財政的に輝政の計画を竣工することができずに明治に至り、建物もとり払われた。



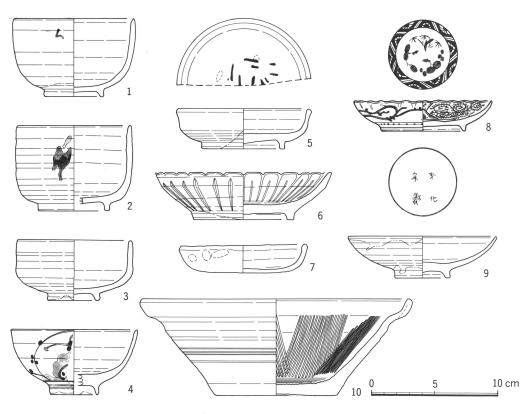


第2図 遺構配置図 (1/500)

## 愛知県埋蔵文化財センター 年報 1993.3



第3図 吉田藩士屋敷図(豊橋市美術博物館所蔵)



第4図 出土遺物実測図

## 調査の概要

調査区は、幕末期に作成された『吉田藩士屋敷図』(第3図) によれば外堀と武家屋敷地に比定される。基本層序は、盛土→茶褐色土(包含層)→黄橙色土(地山)の順である。しかし、明治以降の煉瓦建物や愛知県三河事務所建設による攪乱が激しく、調査区中央部分は地下駐車場に利用されて深く掘り下げられており調査できず、駐車場部分も下水管などの埋設や植樹のため、遺構の残存状況は良好ではなかった。

遺構配置図 (第 2 図) に示したなかで、外堀は数回の掘り返しを受けている上にヒューム管が埋設されており、正確な掘り方は明らかにできないが、幅約15m、深さ約5 mと思われる。外堀の周囲には、武家屋敷地と考えられる遺構である区画溝、礎石建物、井戸がみられる。出土遺物の中に山茶椀や須恵器などがみられるため、吉田城築城以前の遺構の存在が想定される。

出土遺物 (第4図) としては、包含層中の近世陶磁器類を中心に掲載した。1は呉須絵の丸椀、2は鉄絵の丸椀、3は灰釉・鉄釉の腰折椀、4は染付のくらわんか椀、5は鉄絵(摺絵)の丸皿、6は灰釉の型打皿、7は土師皿、8は染付の型打皿、9は灰釉の輪禿皿、10は鉄釉の擂鉢である。ほぼ18世紀代~19世紀代のものが大半を占めるが、山茶椀や須恵器の破片も確認されている。堀からは、大窯期の錆釉の擂鉢や漆椀なども出土している。

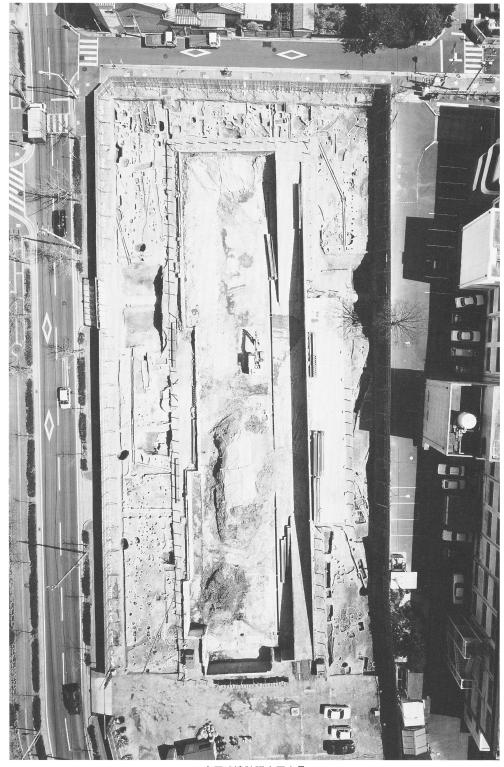
今回の調査により、武家屋敷地の細かい区画も明らかになれば、吉田藩の城下町の変遷 や前述した『吉田藩士屋敷図』との照合も可能になってくるだろう。 (小嶋廣也)



外堀南壁セクション



外堀遺物出土状態



吉田城遺跡調査区全景